

和歌山の偉人から在り方・生き方を学ぼう。

1年生でのキャリア桐の葉Ⅰの第3章は、「和歌山の偉人から在り方・生き方を学ぼう」と題し、和歌山の偉人の生涯について調べるだけにとどまらず、どのように人生を切り拓いていったのか、挫折からどのように立ち直っていったのか調べます。そこから自分の将来を見据え、努力していくことを具体的に考え、スライドにまとめて発表します。調べる偉人は、松下幸之助、濱口梧稜、南方熊楠、陸奥宗光、華岡青洲の5人です。この5人の偉人についての発表を聴くことを通して、人生の教訓を得るとともに学校生活でいろいろなことに意義を見出し努力していこうと考える機会となりました。



松下幸之助 人のことを第一に考える

政府の緊縮策のため失業者が増える中、松下電器の売り上げは半減、在庫が工場にあふれる状態になった。

経営を任せていた2人の幹部が、「従業員を半減するしかない」と進言してきた。このとき、松下幸之助は「従業員を半減するが、従業員は解雇してはならない。給与も全額支給する。工場は半日勤務にし、休日を返上して、ストックの販売に全力を注いでほしい。」と幹部に伝えた。その後、この考えを全従業員に告げた。これを聞いて、いつ解雇されるかと気が気でなかった従業員たちは大喜びで賛成し、工場に残った在庫はたった2か月で完売することとなった。

後日、松下幸之助はこの件について「安易に従業員に手をつけてしまえば、これまで培ってきた従業員との信頼関係は失われてしまう。それに比べたら、半日分の工賃の損失など長い目で見れば問題にはなるまい。」と語ったそうだ。

このエピソードから僕も、第一に人のことを考え、行動・判断し、信頼されるような人になりたいと思いました。

南方熊楠 己の信念を貫いた

熊楠は学術誌への投稿などの実績から、ロンドン大学の総長に認められ、総長室に招かれました。総長は熊楠に、自分が書いて出版したばかりの力作「英訳 竹取物語」を見せました。熊楠は熱心にその原稿を読み始めたのですが、訳におかしいところがあると、首を振ったり、「これはいかんいかん」と首を大きく振ることさえありました。

この態度を見て総長は怒り、「日本人は、外国の長老に礼を尽くすことを知らぬのか」と怒り心頭です。

それに対して南方熊楠は怯むことなく、「間違っていることを正しいと心にもない世辞を並び立てるようなことは決してしない。」という内容のことを告げました。

この一言で最初は怒っていた総長も、「熊楠の言うとおりだ」と思い直し、率直に詫び、それ以来2人は生涯のなかになったそうだ。

このことから、僕も「正しいことは正しい。悪いことは悪い。」と言える人になりたいと思いました。